

満洲からの逃避行・引揚体験と地域社会への貢献

—元開拓団女性と現地を辿りながらの聞き取り報告—

Life History of a Female Returnee from Manchuria: Her Talks while Visiting China

山田 陽子 (名古屋市立大学)

YAMADA Yoko (Nagoya City University)

キーワード：満洲移民、引揚、帰還移民、地域社会、支援

1. はじめに—本報告の背景と目的
2. 調査対象者のプロフィール
3. 現地に立って聞く
4. 支援活動—帰国支援と生活支援の二つの柱
5. 帰還移民の果たした役割
6. 課題

1. はじめに—本報告の背景と目的

本報告は、満洲移民から日本への帰国までと帰国後の地域社会での活動を対象としたライフヒストリーの視点から、移民としての体験、日本に引揚後の帰還移民としての体験と果たした役割を考察する。

1946 年 5 月から開始された葫蘆島からの日本人引揚は、1948 年 9 月までの前期引揚の 2 年 4 カ月間に 105 万人が日本に帰還した。元開拓団女性の語りから、1945 年 8 月 9 日からの逃避行で生じた歴史的出来事と日本に引き揚げてきてからの戦後体験を報告する。そしてその体験は、引揚後の日本の地域社会で「残留者の帰国支援」、「帰国者の生活支援」という二つの支援活動に結びついていくことになる。満洲移民が過酷な逃避行での幾多の困難を知恵と工夫で乗り越えたというだけでなく、その体験を積極的に生かし社会に貢献した事例として報告する。

戦後 66 年が経過し、中国東北部での戦前戦後体験を語れる人は少なくなっている。さらに記憶の風化が進む中、体験を若い世代に伝えようとする人はなおさら少なくなっている。そんな中、調査対象者の元開拓団女性は開拓団部落から葫蘆島までの命がけの逃避行を口述し歴史を知ることの重要性を若い世代に伝え続けることを生涯の使命と考えている。彼女は「生きて帰れた」要因を、自ら分析し、そのことから日本の地域社会での果たすべき役割を認識した。

彼女は 1946 年に引揚後、中国に残された人たちの帰国支援を継続的に行った。あとから帰ってきた人たちが地域生活を営むために必要な生活支援・就労支援に身を捧げた。満洲引揚者が自分より遅れて引き揚げてきた人たちをサポートする、いわゆる「満洲体験共有者」が行う帰国者支援にはどのような意味があるのかを語りから考察した。対象者が日本に帰ってから行った地域社会での活動は、移民を受け入れる地域社会・住民に実践可能な支援方法を示している点で移民受け入れの参考事例になると考えられる。

2. 調査対象者のプロフィール

1925 年生まれ (現在 86 歳)。1940 年、15 歳のときに家族と共に、満洲国三江省 (現、黒龍江省) の開拓団に渡る。戦後 1 年経過した 1946 年、前期集団引揚で家族より早く日本の母村に帰ってきた。

3. 現地に立って聞く

本報告は、対象者と報告者が 11 日間にわたり中国東北部を、共に辿りながら行った聞

き取りおよび引き揚げてきた日本の地域社会における聞き取り調査に基づくものである。対象者への聞き取りは2008年から2010年の約2年間にわたり、居宅訪問、旅行等を通じて信頼関係を構築しながら実施した。主たる聞き取り場所は対象者の居宅・地域と中国東北部各地。対象者と二人で中国東北部の黒龍江省にある開拓団部落跡から逃避行ルートに沿い、現地人から襲撃された地、収容された地、渡った河川、越えた山野などを辿り、引揚の地である遼寧省の葫蘆島まで、現地で起きた出来事を現地に立って語ってもらい、それを聞き取った。

本報告では、まず1940年の入植時から1946年までの満洲体験を報告して対象者の社会的歴史的背景を映し出し、続いて1946年からの帰国後の体験を報告するとともに対象者の果たした役割をまとめる。

4. 支援活動—帰国支援と生活支援の二つの柱

- ①帰国支援・・・1972年の日中国交正常化以降、何度も訪中し、中国残留者を探し出し、帰国意思の確認⇒帰国のための身元引受け
- ②生活支援・・・住居・ことば・就労・子どもの教育（子どもは親に伴われた中国からの移民と考えられる）

5. 帰還移民の果たした役割

- ・ 地域に入ってきた帰国者に「満洲体験共有者」としての支援を行う⇒信頼感の醸成
リレー方式に寄るサポーターの育成（先の帰国者が次の帰国者をサポートする）
- ・ 地域住民と帰国者とを結ぶコーディネーター
- ・ 言語教育の担い手（日中両言語がわかる）として日本語教育・母語教育、日本での就労に必要なことばの教育、子どもの学習支援
- ・ 体験を語り若い世代に歴史の重要性を伝える（語り部）
- ・ 移民の理解者（心のケア）

中国帰国子女調査（山田、2010）で、入国したばかりの時期より、むしろ日本での生活に慣れた頃に生活支援や心理面での支援が必要になることがわかった。この支援タイミングを、先に日本に帰ってきた人は理解できる。また対象者は満洲の病院で看護職に就いていたため、心身のケアに慣れている。

6. 課題

地域における人材の育成と活用、持続的な活動実践など本事例は移民、移民を受け入れる地域社会・住民のありようを示唆するものである。しかしながら本報告は、ひとりの引揚者の口述に依存しており限られた事例にすぎない。今後は他の地域社会での資料収集やフィールド調査を継続的に行う必要があるだろう。また受け入れ社会や制度、移民の帰還前の職業により、日本での生活にどのような相違点が生じるのか、これらの問題について受け入れ地域と関連づけた比較検討も課題である。

[本報告で使用する用語の意味]（五十音順）

移民・・・・・・・・国家を越えて移動する人とその人に伴われた家族等。本報告の対象者は満洲農業移民家族。
帰還移民・・・一度移民として満洲へ渡ったが、敗戦後日本の地域社会に帰り生活することになった人たち。
引揚・・・・・・・・終戦後、外地から日本国内に帰還すること。本報告においては、主に1946年から始まった満洲からの帰国を指す。

地域・・・・・・・・人間が営む生活の場を言い、居住地区内、町内等を指し、「地域社会」とは隣接する土地に暮らす人々の集合地で人々の生活範囲を指す。

参考文献

- 蘭信三編（2009）『中国残留日本人という経験—「満洲」と日本を問い続けて』 勉誠出版
村井忠政編著（2007）『トランスナショナル・アイデンティティと多文化共生—グローバル時代の日系人』 明石書店
山田陽子（2010）『中国人就学生と中国帰国子女—中国から渡日した子どもたちの生活実態と言語』 風媒社
山田陽子（2011）『満洲—日本人の足跡をたどる』 梅田出版